

所沢市史講座「谷戸のある生活」所沢の魅力、再発見講座③

2024-2-19 記 小川 雅愛

- ◆実施日 2024-2-15(木)13:30～15:50 ◆出席者 32 名
- ◆会 場 市生涯学習推進センター 多目的室
- ◆講 師 文化財保護全国協議会会員 市民大学指導講師 ところざわ倶楽部特別会員
門 内 政 広 先生
- ◆テキスト 講義用A3 判資料「谷戸のある生活～所沢の魅力再発見」

今回の講座は 2023 年 9 月 28 日の講座と同じタイトルの続編です。手違いで完結しなかった弥生時代以降の続編の講座を先生のご厚志により早期に開催することになり、実施したのですが、前 2 回の講義がわかりやすく、また謎解きが興味津々でたのしく学べること、所沢をもっと知りたい等々、前 2 回の講座以上に多くの会員に集まっていただき盛りあがりました。

途中休憩をはさみ 1 時間半の前回の旧石器時代と縄文時代のポイントを振り返りながらの本日の弥生時代、古墳時代の講義、そのあとは一休みし、質疑応答を約 40 分。先生は座談会に近い質疑に時間超過になりながら快く明解に応じていただきました。先生は市民大学で古代史分野講座を 2 時限 3 時間で指導されておられるところを、当会では 3 時限 5 時間みっちり丁寧に指導いただき、大変勉強になり、市民大学の当講座をマスターした以上のものがあり、改めて先生には感謝申し上げます。

1. 講座の前回の復習ポイント

復習は旧石器時代の砂川遺跡と縄文時代の西上遺跡に関連して説明をうけました。

- 1) 旧石器時代の遺物は石器のみ、狩猟採集中心、定住は考えられないと思われます。砂川遺跡の調査では石器すべての地点の記録と調査後の接合の試みの手法により当時の生活の様相や移動(または遊動)を解明しようとしたことにあります。そのようなアプローチと分析の手法がその後の研究の画期となったと理解されます。旧石器時代の研究を志す方はこのように実践された調査と研究は必ず道標とすることになり、これが砂川遺跡のすごいところと先生は強調されました。ナイフ形石器の工法がわかったことも大きな成果のようです。
- 2) 縄文時代の木材や人骨は酸性土壌の日本では残らないが火災になると炭化した木材や人骨は残り、焼けた木材をみるとほとんどがクリ材を用いたことからクリの木を育てていたことがわかります。三内丸山遺跡でそのことは証明されているとの事です。縄文時代は定住生活が始まり、豊かな食料を得ていたようすをイメージさせます。現代の生活につながる萌芽が縄文時代にはあるようです。

2. 講義の概要ポイント

1) 弥生時代を主に縄文時代と対比させて

■所沢の弥生時代は縄文時代に比べ遺跡が急減しますが。弥生は縄文に比べ寒くなり、まだ谷戸の開発が進まず、所沢は多少住みにくいところとなったためと考えられます。この時代の遺跡では陽当たりのよい日向遺跡と東の上遺跡に代表されます。

■水田稲作が始まってきたことを板付遺跡(水田跡と土器)、日本で最古の水田遺跡 菜畑遺跡(稲収穫用石器と農具)、現代の農具と共通点のある農具などの例で示されました。

■縄文時代の住居は丘陵地の最上部にあり、水くみは大変、弥生時代は谷戸に近い水の得やすい等高線でみると急崖のハケの近くに立地したことが日向遺跡の例で説明されました。

■縄文時代の住居は広場を囲んだ円形集落、弥生時代は環濠集落で大塚遺跡と吉野ケ里遺跡で説明、集落は環濠の中に不規則に建てられていました。この時代に抗争や戦いが始まったことを遺体埋葬例、頭部なし遺体、首に武器の破片の刺さった遺体がある吉野ケ里遺跡で解説をうけました。武器・土器とも弥生前期・中期、後期(卑弥呼の時代)はかなりの変遷と進歩を感じます。それに比べ縄文時代は平等で争いのない平和な時代であると先生は高く評価されています。

■墓は縄文時代には貝塚の例のように集落のなか、弥生時代になると環濠や集落から離れて埋葬され、墓もそれぞれ地方によって特徴のある型が発達したようです。東の上遺跡では一辺が 8 mから10mの方形周溝墓が発見されています。

■弥生時代の竪穴住居は四角形になり角丸の様式に変化、縄文時代は円形であるといいます。これは次の古墳時代には完全に四角形の現代家屋と同じになっていきます。

2) 古墳時代を前時代と対比させて

■所沢の古墳時代の遺跡分布を弥生時代のそれと比べると狭山丘陵の谷戸や川の流域に遺跡が急増しているのが読み取れますがこの時代になると谷戸の開発と利用(湿地の利用)が進んできたことを反映しているようです。住居は丘陵地を少し降りところで、後背地である丘陵地の平坦部は畑として利用が始まりました。

■古墳時代は前方後円墳が卓越してきますがヤマト王権の力が各地に伸長し、その様式が統一的に及んだことを示しているようです。鉄製農具は荒地の開墾、農具の改良に利用され、土師器も出てくるのがこの時代です。

■椿峰地区の高峰遺跡、宮前遺跡(北野天神に因んだ地名から)ほか2つの遺跡は谷戸との関連が想定される遺跡です。椿峰分館近く的高峰遺跡・城上第二遺跡・野竹遺跡の5. 6世紀と 7 世紀の集落の変遷図の比較からは谷戸の開発利用が進んだことが読み取れます。

■古墳時代になると四角形竪穴住居の奥にいいよ竈ができます。入り口右には食料の貯蔵施設を持つのが特徴的です。縄文時代や弥生時代は竪穴住居のほぼ真ん中に囲炉裏があったことは復元住居でよく目にします。竈は水を入れた土器を据え、その上に蒸し土器を重ねて利用していたと考えられています。

■所沢にも古墳はあったようですが、宅地開発等で表土が破壊され完全には残っていないとの事

です。わずかに確認できる山下後遺跡 1 号墳の図解によることができます。周囲を円形にした中央に竪穴式の石室です。横穴式の石室は継続使用可能、竪穴式石室は一度きりです。

3. 質疑応答

Mさんの質問 砂川遺跡の石器・石材は凝灰岩(チャート)ですが、当時非常に貴重なものだったと思います。所沢の縄文人はそれを物々交換で得ていたのか、貴重なものを交換できるものを所沢地域で持っていたのか?どのようにお考えでしょうかとの質問について、

先生の回答は 縄文人は定住ではなく回遊していたので凝灰岩等取得できる場所を知っていたのではないかと、黒耀石の各地での出土から考えてその素材はそれほど貴重な物ではなかったのではないかと ということでした。

但し、証明するものはなく考えられるもののご意見でした。

古代の生活の様子は遺跡(遺物・遺構)で証明可能な範囲でないとはっきりしたことは言えないというのは前回からの先生の一貫したお応えでした。

その他 縄文の文様、所沢の稲作、土器の体様、犬と人との共同生活の時期など質問多々ありました。先生は今回のこうした座談会的な質疑は好ましいことだと述べられていました。

4. 講義をうけて

所沢の古代の様子に思いをはせながら、先人が自然や地形に適合しつつ、工夫を重ねて地域で生活してきたことを感じ取ることができました。なかでも狭山丘陵は所沢の 3 つの河川の源流部であり、水辺の豊かな住みやすい環境をはぐくんできたこと、丘陵の出口に存在する谷戸が重要であったことが再認識できました。

狭山丘陵は古代人にとって母なる丘陵と言えるかもしれませんし、現代でも所沢にとって象徴的な丘陵であり、保全しつつまでも大切にしていきたいものです。

質疑の時間は先生の考古学への思い・愛を強く感じられて大変良い講義であったと思います。

この講座 3 回は所沢の魅力、再発見ということでしたが、全くタイトルにふさわしいと思いましたし、地域の古代の様子が生き生きとイメージでき、遺跡はこんなにすごいのかという思いを強くし、地域の文化財に改めて誇りを感じました。先生には機会があればさらなるご指導をお願いしたいと思います。

担当

A グループ 谷恵子 曾部康子 小川雅愛